

'21ミス日本「海の日」吉田さくらさん

◆【さくらの休日 第2回】

古(いにしえ)から変わらない

岩礁と船を見守り続ける灯台に歴史を感じた海の旅！②

【古代の香り感じる「雨晴」】

雨晴海岸(あまはらしかいがん)は、万葉集に「渋谿(しぶたに)」と詠まれた岩礁が多く、白砂青松の景勝地で、富山湾越しに3000メートル級の立山連峰を望むことができます。万葉集の代表的歌人である大伴家持もしばしば雨晴海岸を訪れ、いくつもの歌を詠んだといわれています。また、道の駅正面に位置する「義経岩」は、源義経が奥州へ落ち延びる途中、にわか雨が晴れるのを待ったという岩で、地名「雨晴」の由来となったそうです。

道の駅「雨晴」の一階にある情報発信コーナーで、この地の歴史と名前の由来を学び、はるか昔の人々も同じ雨晴海岸の景色を楽しんでいたという事実を知り、不思議な気持ちになりました。

歴史に想いを馳せた後は、道の駅の前に広がる雨晴海岸へ向かいました。目の前に富山湾の絶景が広がり、どこまでも続きそうな海の水平線に吸い込まれそうになりました。大きく息を吸い、深呼吸をすると、潮の香りが身体いっぱいになり、幸せに満ち溢れました。自分の目と耳、鼻、身体の全てをつかって海を感じ、立山連峰の絶景を目に焼き付けました。

義経社を参拝し、義経岩、女岩を眺めるなど、歴史を感じながら海の絶景を楽しむことができました。

雨晴海岸からの景色は、松尾芭蕉が「おくのほそ道」に詠んだ由緒地でもあり「女岩」と「義経岩」は「『おくのほそ道の風景地』一有磯海(ありそうみ)一」として国の名勝に指定されています。歴史上の人物を彷彿とさせる雨晴海岸には、ゆったりとした時間が流れていました。